

# 留萌がんばるかいNEWS

# 留萌すごいぞ!特集 市立病院編

この広報紙の作成及び配布は(財)秋山記念生命科学振興財団の社会貢献活動助成事業に申請中の事業です。

## 外科医としてみた留萌市立病院



### 副院長 越湖 進 医学博士

平成14年、留萌市立病院外科医長として赴任。同年、抗感染性人工血管の開発・研究で医学博士号を授与され、特許を取得。この研究成果は、血管外科領域における世界的権威のある医学専門誌 Journal of Vascular Surgery に掲載。翌15年、副院長に就任。

#### ◎主な経歴

- H01.03 旭川医科大学卒業
- H01.10 旭川市立病院研修医
- H02.10 市立釧路総合病院 外科医員
- H04.10 旭川赤十字病院 麻酔科医員
- H11.10 留萌市立総合病院 外科医長
- H12.04 市立根室病院 外科医長
- H13.06 旭川医科大学 第1外科助手
- H14.04 留萌市立病院 外科医長
- H15.04 留萌市立病院 副院長
- H16 旭川医科大学 臨床指導助教授

#### ◎主な資格

- 日本外科学会指導医
- 日本外科学会認定医
- 日本胸部外科学会認定医
- 外科専門医
- 消化器外科専門医
- 呼吸器外科専門医
- 日本乳癌学会認定医
- 消化器癌外科治療認定医

### なぜ外科医になったのですか？

現在はずいぶん廃止されましたが、わが国では色覚検査が強制されていた時代がありました。子供社会は時に残酷な一面があります。この検査によって辛い経験をした方もいると思います。実は私もその一人です。

その反動で、私は辛い思いをしていて人のために役に立つ人になりたいと思うようになっていました。そのため、高校の進路選択で医学部への進学を希望したのですが、進路指導の先生はこの色覚検査の結果から他の学部を強く勧めました。そこで私は、北大の教育学部へと進学したのですが、学年が進み徐々に就職の事が話題になってくると、自分自身の色覚について正確に把握しておきたいという気持ちで募りました。そこで、権威の先生がいる旭川医科大学付属病院にて診察を受けてみることにしました。

担当の先生から詳細な説明を受けましたが、「こういう仕事にも全く問題はない」とのことでした。この言葉を聞いて、医師になりたいという気持ちで決定的なものとなり、受験勉強をもう一度やり直すことにしたのです。

もはや私にとっては単調な受験勉強さえも全く苦にならず、最初に患者として訪れた旭川医科大学に合格し、今度は学生として通うことになったのです。



### ◎留萌市立病院手術室

世界でも最高レベルの空気清浄度を維持するために、さまざまな工夫がなされている。例えば、周辺大気より気圧を高くし、外部の雑菌から遮断されている。

### 外科医からみた留萌市立病院は？

外科は特にチーム医療を実践しなければならず、同僚医師はもちろん、看護師・コメディカルの病院の皆さんに支えられて手術をしています。その中でも麻酔医二名が二十四時間体制をとっている点評価したいと思えます。麻酔医が全身を管理しているため、執刀医が「患者」に集中できるのです。麻酔医の勤務は相当なものですが、留萌市立病院では一般外科・消化器外科・呼吸器外科・血管外科・整形外科・脳神経外科・形成外科・泌尿器科・産婦人科・眼科などのいわゆる手術が年間千五百例、うち麻酔医が管理するものが八百例以上になります。更に、本年より病理医が常勤している点も評価されるべきです。手術前や手術中に検査結果を知ることができる

大学ではさっそく色覚についてについて勉強しました。すると色覚は遺伝子によるものであることがわかりました。更に、色覚異常というより「色の見え方の差異」というべきものだとかかりました。

実生活はもちろん、臨床医のように特別に目を分けて見えたり、色覚が「差異」を矯正するのは不自然に感じている現場である「外科領域」に移っていったのです。

一口に外科領域といっても、心臓血管・消化器・呼吸器・小児外科の四つに大別されます。ほとんどの外科医が、この中の一つを専門にします。私は、肺を中心とした「呼吸器」といわれる部分を熱心に勉強し、経験を積んできました。

ただ、留萌市立病院は消化器系の患者さんが多く、みなさんもご存知のとおり約五万人の医療圏をもつ唯一のセンター病院です。そのため、ほとんどすべての疾患に対応することが求められています。このような重大な使命を担っている留萌市立病院の一員として奉職する以上、外科領域において若手分野がないというのは当然として、更に高度なレベルでの医療技術を提供したいと考えました。そこで、学食・手術見学にも積極的に向いたり、講師として北大第二外科の近藤哲教授や旭川医大第一外科の徳嶋唯博教授に留萌医大においてのたぐい、手術指導を受けたりもしました。

その結果、こちらに赴任してから消化器外科専門医の資格を取得することができました。臨床医として、専門領域を広げることは後輩医師への指導などの業務の増大と共に日々の学習意欲が増えることを意味しています。しかし、こうした積み重ねこそ、地域で発生した症例を地域で完治する医療体制へとつながるのです。

医師になるうと出発点は子供の時の辛い経験ですが、外科医としての努力をいままお継続できるのは、みなさんからの感謝の言葉を原動力にしているからです。

### 留萌市立病院の外科の特徴は？

腹腔鏡・胸腔鏡下手術を積極的に取り入れてきました。我が国では検査技術が非常に発達した国で、胃がん全体と占める早期胃がんの率が四割五割となっています。早期胃がんは更によりリンパ節への転移の有無により、大別することができず、転移がなければESDが当院での第一適応となり、リンパ節への転移がある場合には、外科手術が適応となります。病状により腹腔鏡手術も行われます。

腹腔鏡も内視鏡の一種です。ESDで使用するのは口から挿入する内視鏡で、皆さんご存知のようにクネクネ曲がった特徴があります。しかし、腹腔鏡は曲がったりはせず、先端にメス・はさみ・ピンセットが付いた「棒状」になります。ほんの小さく切開をするだけで、ほとんど痛みが少なく、傷はほとんど見えないという利点があります。また、ESD同様、入院期間が一週間程度と非常に短いことができます。このような短期間で社会復帰ができるのは、皆さんにとって大きなメリットであると考えられています。

ガンと根絶と考えると、目立たない手術跡となる事を実現させた腹腔鏡・胸腔鏡下手術は「消化器系がんと「一部」」「胆のう」「虫垂」などをさまざまな手術分野において活躍しています。

### Team Koshiko



医師・看護師などさまざまな国家資格を有する専門家で構成される。豊富な実践経験と高い学習意欲を合わせ持つスタッフが、越湖先生の誇り。

### 一人や親戚などには、乳がんが一番多いのですが、

乳がんが日本の女性が最もかかりやすいガンだといわれていよう。国を挙げての検診が進んでいるアメリカの統計では、八人に一人がかかると言われていて、乳がんの手術といえば、以前は女性のシンボルともいえる乳房を乳頭・乳輪も含めて全部切除してしまう方法もありませんでした。患者さんにとっては精神的に負担が大きい手術方法であることは言うまでもありません。現在、当科では全体的に乳がんの中で、約半分程度の患者さんに乳房温存手術を適応しています。

当科には乳がんの自己検診などを行なうときに大きな比率を占めています。つまり、いまでもなく触って違和感のある大きくなったから受診されることになりました。とはいえず、多くの女性が乳房を温存し、完治しています。実は、乳がんについて言えばガン自体の大きさが生命に危険を及ぼしているわけではなからず、早期に発見されれば、今後は検診を徹底させ、違和感のない今後の時点での発見に尽力できれば幸いです。

ガンは二ミリの以上の大きさに成長するとときには新たな血管を作り出す。留萌市立病院の備えている四列マルチスライストMRRがあれば、こうした微小なガンも発見できます。また、マンモグラフィという乳がんを発見するための最適化された装置もありません。この装置をどんどん活用していただければと思います。